

彼岸会だより 門信徒の皆様え

和 上 記

現代の私達は新型ウィルスの拡大防止に追われ、医療関係の人や研究機関の人々の苦勞と焦りの中に居る未経験の毎日を送っています。

しかし、必ずやこれを克服できるものと信じ、忍耐の中に希望を持つ者です。

この病理の一つを取り上げてもこのようですから、他の出来事がどれだけ私達の身と心に次々と困難と落胆を起こさせ、それが次の苦惱の種子となって蓄積し、また苦惱の世界を引き起こすことを思う時、不可解な運命を担っている人生と思わざるを得ません。

人生は苦なり。と叫んだ先達が居りましたが、樂を求め止まぬ本能の自我にすれば敵に会うようなもので鬪争心もむき出しにして対してきた私達かも知れません。

幸せや楽しみは必して道ばたの石ころのように手に取られず、苦勞を重ねても尚ほ手中にすることもできず、また、それを得る者はわずかですから、樂に苦がつきまとい、幸には不幸が、愛情には憎しみがつきまとう矛盾の中に居るとしか云いようがないのですね。

龍樹菩薩（真宗では菩薩の名は利他の時に使います）の和讃に元祖親鸞聖人は「生死の苦海ほとりなし久しく沈めるわれらをば 弥陀弘誓の船のみぞ乗せて必ず渡しける」と大論文の特長を教えられました。

私達の自我の意識誕生は久遠の大昔、現象界の転変に順応しようとして盛んに働き始めた時、現象界を真也、しんなり実也と錯覚して寄所としたことから始まります。これを無明生起むみょうしょうきの姿と仏教では教えます。無明の認識を始めた時から、無明より煩惱を生じ、久しい邪見と邪智の蓄積の経験力が矛盾とどうちゃく瞠着（正しい智恵が失って自己に対して不明の状態）を生じ遂に暗い運命の力は煩惱の業力となって様々に我らの人生を覆い尽くしてきました。その特長が四顛倒と云われる真逆まぎやくの姿なのでした。これは顛倒の結果として四苦八苦の色を重ね、

- 一、現象の有為転変の無常を常住と執着する顛倒。
- 二、苦楽相ひはなれず 楽は短く苦は長きに非楽ひらくを極楽と相似する執着の顛倒。
- 三、昏迷の自我をして清浄真実の大我と執着する顛倒。
- 四、無明煩惱の自我の種子不浄は自体不浄を形成し、その集まりが境界不浄なるのに、この五蘊四大ごうんしだいのけじょう仮成の装ひを以て彼の清浄我と執着する顛倒。

これらを総合的に「生死ノ大海」と、たとえられ、万物ばんぶつ

の靈長の位に立つ者は、この大困難性を解決する使命が各自の人生に求められているのですが、悲しい哉、実際は人生誕生の目的を知らず、一般の考え方として、仕事一途となってきた現在の現状が伺えます。

我らは、祖師聖人に彼様な夢幻の眠りから^さ覚まされ救済されて、速やかに生死の大海を逃れ涅槃寂靜の城（彼岸）に入らずんば^{いかが}如何南浮人身（仏在世に値遇する人格）の果報と云わんや、と激励されているのでした。

浄土高僧の初祖(龍樹)は仏陀の一切衆生救済の大愛を「信佛の因縁」として発表され、善導大師は光明名号の因縁と訳し、親鸞元祖は内容を明かされて「難思の弘誓と無碍の光明」の二つが弥陀如来の秘宝として働かせて、この大因縁の蓮華台に我らが無条件に乗託させようとされているのであります。

大經悲化段に彼岸を説きて申さるには

弥勒菩薩に告げ玉ふには諸天人も等しく聞きたまへ。
無量寿国の大信者の功德、智恵は称説できないほどであり、又、その国土は微妙安樂と清淨なることも然りである。それ故にこの国の大信者は何ぞ力^{なん つとめ}て善を為さぬことがあろう。念道^{ねんどう}の自然といふものは無上下にあ^{むじょうげ}らはるものである。そして無^む辺^{へん}際^{ざい}に洞^{どう}達^{たつ}するものであ

る。それ故に宜しく各^{おのおの}勤めて精進することになる。
努力は自ら^{みづか}これをもとめられるのである。それには必ず超絶し去ることを得て安楽国に往生せねば得られぬ。この国に往生すると横に五^{よこざま}悪趣^きを截られ、悪趣の道は自然に閉じ、その成仏の道を昇^{やす}って往くに易くして自然である。この国は我らの生活を破り、人生の道に逆らって行くものではなく、人間の本能に反逆して努力して行くでもない。自然のひく所である。何ぞ世事を棄^すて自力を策^{さくれい}励し、求めずとも獲べき極長生（他力の信心）を獲れば^{じゅうらくきわま}寿樂極りなし。

又、前住聖人は源信和尚の往生要集の文を引かれて彼岸を勧められました。

彼の西方世界は樂を受くること窮^{きわま}りなく、人天^{こうしょう}交渉して両^{ふたつ}ながら相見^{あいみ}ることを得ん。慈悲心に薰^{くん}じて互いに一子^{いっし}の如し。共に瑠璃地^{るりじ}の上に経行^{きょうぎょう}し、同じく梅檀林^{せんだんりん}の間に遊戯^{ゆうげ}す。宮殿より宮殿^{りんち}に至り、林池より林池に至る。若し寂^{しづか}ならんと欲^{ほつ}する時は、風浪^{ふうろうげんかん}絃管自から耳下^{にげ}をへだつ。若し見んと欲^{さんせんけいこくなほげんぜん}する時は山川溪谷尚眼前^{こうみそくほう}に現^{こころ}ず。香味触法念^{しか}に随^{ひたい}ふてまた然り。或は飛梯を渡りて伎樂^{ぎがく}を作し、或は虚空^{こくう}に昇^{のぼ}って神通^{じんずう}を現^{じんずう}ず。或は他方^{たほう}の大士^{だいじ}に随^{ごうそう}って迎送^{てんにんしょうじゅうともな}し、或は天人聖衆に伴^{ともな}って

以て遊覧す。或は宝池の辺に至って新生の人を慰問す。
汝知るや否や、是処を極楽世界と名く（乃至）。

四顛倒の三界火宅を此岸と名づけ、無為涅槃の極楽を彼岸と名づくのですから心の寄所を転ずることが急務であり、特に弥陀独特の大悲は、難思の弘誓に名づく釈迦知識の真理の絶叫と、無碍の光明と名づく至上最勝の徳との二つが一つと成り、凡夫直入の弥陀彼岸に生まれさす
唯有浄土の一門を設けられたのでした。

ここが弥陀釈迦、二尊一教の真宗の救済道が確立されました。

釈迦知識の言霊は、弥陀の五劫思惟 兆載永劫修行の功德が我ら衆生に成り代わって御成就下さった願行功德が其の名号に摂められてある故に、其の名号に会わせてやりたや、聞かせてやりたやの哀れみが幾度も幾度も我が機に乃至十念と重なって働いてくださる言霊でありました。

今、我らはその名号を聞信するばかりで彼岸に至らせ下さるのですから、今期彼岸会を通して再度味読していただき度いのでありました。

コロナ疲れを一時でも癒されれば幸いです。

(完)